

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2010年6月発行～

ひびきジャーナル



〒106-0031 東京都港区西麻布 2-9-2 Tel:03-3407-3726

Fax:03-3797-5640 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

No.25

発行日 平成 22 年 6 月 30 日

発行責任者 玉木宏樹

編集 NPO 法人 純正律音楽研究会
玉木宏樹・相坂政夫



7月、いよいよ暑い夏に突入です。皆様お元気でお過ごしのことと思います。ひびきジャーナル No.25 の発刊です。新 CD「桜から春の海まで」は 3 月 29 日と 30 日の二日間、TA スタジオで録音されました。表紙の写真はその時の録音風景です。今回の CD は、日本の懐かしいメロディを、純正律とピタゴラス音律を駆使して、美しいハーモニーを奏でていきます。今後のコンサートは、9 月 25 日「ラリール」、12 月 23 日都電貸切コンサートと予定しております。ご予約等、詳細は巻末にあります「今後のスケジュール」にてご確認ください。

♪ 玉木宏樹の、この人と響き合う♪

《次世代の純正律-崎谷さん》

対談、崎谷直人(ヴァイオリニスト)

青木日出男(ストリング編集長)

玉木宏樹

今回御登場願うのは、1987年生まれ、弱冠23才の前途洋々たる新星ヴァイオリニスト、崎谷直人さんです。幼少の頃から外国で勉強し、15才でケルン音大、そしてパリ市立音楽院、東京に戻って、桐朋音大のディプロマコースに在籍、当研究会ではおなじみの荒井章乃さんは一年上とのこと。

崎谷さんを紹介したいと連絡があったのは、おなじみのストリング誌編集長青木さんです。彼はずっとソリストへのインタビューで、音律のことを訊きまくっていますが、適確な答えをもらったことがないどころか、音律のことを話し出すと怒り出す人もいる、と嘆きの多かった今までの中で、ひとつの音の高さを4つ奏き分けているという青年がいるのでぜひ会ってほしいとのこと。二つ返事でOKをし、指定時間の2時間前に事務所につくと、丁度ストリング誌の最新号が届いていて、表紙が崎谷さんで、インタビューが音律の話。内容は全く間違いのないマツウな内容で、純正律のことをよく分かっているのは、話の中身でよく分かります。そこで今回は、その後の彼と青木さんと私の会話を紹介しましょう。(2010.6.25)

青木さん(以下青木)：私はここんとこずっとソリストのインタビューで音律のことを訊いているんですが。

玉木：音律の特集号で私が登場して以来ですね。もう5.6年になりますか？

青木：いいえ、もう7.8年になります。それで未だにしつこくみなさんに音律のことを訊いているんだけど、適確な答えがなかなかないし、中には怒り出す人もいる。マイスキーなんか、そんなことをしゃべり出すと、1時間以上かかると言われるし。そんな中で崎谷さんと話してびっくりしたんですよ、一つの音に4つの音程なんて……。崎谷さんが音律に拘わりを持つようになったのはいつごろですか。

崎谷さん(以下崎谷)：クアルテットをやり出してからですね。

青木：というと？

崎谷：綺麗な音程でアンサンブルをやると気持ちがいいんですよ。メンバーを組みかえて以来は、譜面をさらう前に、徹底的に音程の練習に時間をかけます。それでも実現度は70%くらいかな。

玉木：僕も若いとき、ハードに音程に拘ったけど、良くて80%くらいかな。たいていの人は「ド」の「#」は「レ」の「b」よりは高い、これはピタゴラスなんだけど、子供の時「ド」の「#」はなるべく「レ」に近く取るように言われる。「レ」の「b」は「ド」に近くとるようにと。ヴィオラの人たちはヴァイオリンよりサイズが大きいのに、このくっつける音程のとり方をするから極端なピタゴラスになってしまう。それに対してチェロは、「#」と「b」は全く同じという平均律的な取り方をするから、音程が合うわけない。これは世界中どこでもそうです。

崎谷：(同意の頷き)

玉木：シベリウスの弦カル「親愛なる声」なんて、シベリウスはヴァイオリンも奏していたのに、ある所ではチェロとヴィオラのユニゾンがでてくる。オクターヴじゃなくてね。こんなの死んだって合うわけないから、すぐやめたけどね。

青木：崎谷さんの4つの音程について説明して下さい。

(彼は理路整然と見事に奏分けたけど、文章では表現できないので残念ながら割愛)

青木：アンサンブルの練習法については？

崎谷：まず音程合わせですが、導音を高くすることだけをやっている人の横のラインはいいけど、タテが合わなくなる。

玉木：例えばカザルスの表情的音程、つまりシューマンのチェロコンチェルトのソロの出だしの4小節目の「D」の「#」を高くするという奴ね。

崎谷：それだけやって戻って来れない人とはやれませんか。

青木・玉木：(笑)

崎谷：ジュリアードでは導音を高くとって3度と6度は合わないものだ、と最初に教える。ヨーロッパではそんなバカな、と言ってみんな笑っています。

青木：みんなにソリストの教育をするんですか？

玉木：6度の問題でいうと、ヴィオッティは6度をピタゴラスで取る音階を工夫し、古代ギリシャとは違うヨーロッパ音階と呼んだというのは知っていますか？

崎谷：いえ、知りません。

玉木：逆にレオポルド・モーツァルトはミーン・トーン(中全音律)に合わせるため、完全5度は狭めるように言っているよね。

崎谷：そうですね。

玉木：でも大抵の人はピタゴラスだから。ルジェーロ・リッチなんて典型。

崎谷：(大笑い)。シューマンのソナタに6度が連続して出てくる所があるんですけど、転調の時に大問題が出てくる。それでさっき奏き分けた音程を使わないと解決できないんです。一段目、二段目というんですけど。

玉木：それは聞いたことはないな。

崎谷：我々の言い方ですから。

玉木：チェンバロの古典調律の人は、1コンマ低く、2コンマ低くというけどね。

崎谷：それと同じだと思います。基本的には音程のルールを決めないよね。

玉木：ヨーロッパの人たちは耳がいいのかな？

崎谷：ヨーロッパは教会がありますからね。

青木：平均律での音程をおかしいと思わない人たちは変ですよ。

崎谷：耳が悪いんですよ。

玉木：気持ちの悪くない音程を取りたいよね。

崎谷：気持ち悪いと分かんないのは耳が悪い。



(崎谷直人さん)

その後、NPO 法人 純正律音楽研究会の説明をして、会報を渡し、都電コンサートのことやら、昔のソニーのCD等を聴いてもらい、Duo Vlnによる純正律編曲「むすんでひらいて」を二人で演奏。また「革命的音階教本」の私の演奏には大いに目をむいて関心を寄せていました。そして今作成中の「Duoによる革命的ヴァイオリン入門」の考え方にも大いに共鳴した様子でした。

最後に、「崎谷さんには是非、この研究会の後継者になってほしい」というと、彼は笑いながら「分かりました」と答え、終り。彼はその翌日にウェールズ弦楽四重奏団として留学の為にスイスへ旅立つとのこと。お達者で～。

国的純正律音楽入門 第 25 回 連載
《革命的ヴァイオリン入門教本について》

純正律音楽研究会代表

作曲家・ヴァイオリン奏者 玉木宏樹

私はいま、レッスンの友社から発刊予定の「Duo による革命的ヴァイオリン入門」のテキスト作りに追われています。レッスンの友社といえば「ストリング」誌の青木さんと、丁々発止で打ち合わせ中。私は初めてヴァイオリンを持つ子供とか、レイト・スターターの実態を知らないので、そういう現場にとても詳しいヴァイオリンの出張教師、岩本浩一氏を始めとした、何人かの貴重な意見を拝聴しつつ、作業をすすめています。今回はそのお話。

ヴァイオリン入門の教本は、世界中に数え切れないほどあると思われませんが、我が日本では、鈴木メソッドか、いわゆる「白い教本(新しいヴァイオリン教本)」が主流だと思われています。ふたつとも、とてもすばらしい教本であるのはまちがいありません。そこに敢えて私が参入しようとするのは、従来の視点を越えて、新しい境地を提唱したいからなのです。従来の教本は、子供を始めとした初心者に、最初からソリストになるように訓練しようとしているように思えてなりません。

ヴァイオリンのかまえ方、弓の使い方、これだけでも大変なのは私自身も経験したことです。そしてやっと音を出すことになると、初心者には、楽譜をつきつけ、全くおもしろくもない開放弦での 2 分音符、4 分音符の奏き分けを延々とやらされます。ヴァイオリンはピアノのように、叩けば音が出る楽器ではないから、2 分音符、4 分音符の奏きわけは大変です。姉がピアノを習っていたら、ヴァイオリンを習っている妹は延々とつまらない練習をやらされ、ストレスに見舞われます。

それはそれでガマンしなさいでなんとかなりますが、ピアノを習っていると、すぐに左手が加わり、そのリズムに合わせて右手でメロディを弾くという流れになります。すると、ごく自然に 2 分音符、4 分音符、附点音符を弾けるようになります。一方、左手のリズムによるトータルイメージのないヴァイオリンは、

いつも単独に右手(ピアノにすれば)のみです。これではトータルに音楽をすることにおいて、明らかにヴァイオリン入門は劣っています。このピアノの左手の役割を、先生なり、上級者にやってもらって、最初からトータルな音楽全体像を初心者を楽しんでもらおうというのが新教本の狙いです。

そこで、開放弦の無味乾燥の初心者のパートに対して、先生が、二重奏(Duo)として、すばらしいメロディを奏くことによって、自分のやっている音楽的意味が分かってくるのです。先生と一緒にやることによって、いろんな音符の意味も分かるし、休み方の意味も分かるのです。単独でのレッスンだと先生は、休みを、ただリズムを教えるように指導するだけですが、Duoだと、自分が休んでいる間に、他人が何をやっているのかが分かります。これは、アンサンブルの基本なのです。ヴァイオリンは、どんなに上手くなっても、自分ひとりで出来ることはあまりありません。人の前でメロディだけ奏いても、なんだかなあだし、うまくやれても1時間はもちません。バッハの無伴奏だけで2時間のステージなんて考えられないし、やっても無意味でしょう。よほどのディープなファンなら別ですが。

それからもうひとつ重要なこと、多くのヴァイオリニストに欠如していると思われる和音(ハーモニー)感覚が、知らないうちに身につくということです。そして、音程のいい先生とのハーモニーは、よくハモる快感たる純正律そのものが実感でき、二人でやることがとても楽しくなります。

私はこの教本作りにあたり、岩本さんというとても優秀なヴァイオリン教師の強力な助言を頂いています。岩本さんは、初めてヴァイオリンをさわる、子供、大人に何人も接してきて、そういう経験のない私に、ビックリするような試行錯誤の数々を教えてもらっています。そういう試行錯誤の起こらない内容の教本をめざしています。乞うご期待!!

ムッシュ黒木の純正律講座 第 25 時限目

平均律普及の

思想的背景について(14)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

平均律が 18 世紀に実用化され普及したという説は意外に根強い。例えば、坂崎紀という音楽学者は 2001 年の「平均律の歴史的位置」¹で以下のように言う。

共有弦クラヴィコードの実例、テュルクと C. P. E. バッハの記述から、ドイツにおいては 18 世紀中葉には平均律が一般に広く使用されていたことが確実とみなせる。

[...] 音楽作品の実例(たとえばウイラールトやジェスアルドなどの半音階的和声進行を含む作品)や同時代の記述から総合的に判断するなら、平均律は 16 世紀後半～17 世紀初頭にある程度の範囲で実用化されていたと考えるのが妥当だが、最大限遡ればすでに 16 世紀初頭に平均律に調律された鍵盤楽器が存在した可能性さえあるといえるだろう。

坂崎は大学、大学院ともに東京芸術大学の出身である。そのような人間が「純正律」や「古典調律」に関する議論を知らないということはあるにせよ、その音の響きを聞いたことがないということもないだろう。それでもなお坂崎が平均律 18 世紀普及説を堅持しているのなら、そこにあるのは思想信条の問題であると言える。つまりここでの最後の文言「最大限遡ればすでに 16 世紀初頭に平均律に調律された鍵盤楽器が存在した可能性さえあるといえるだろう」から分かるように、坂崎は平均律を人類が果たした偉大な発見と見なし、その起源をさかのぼる研究に価値があると捉えているのである。平均律実用の歴史が古ければ古いほど、平均律の正しさが確かなものとなる上に、それを開発した人間の偉大さも、その歴史を探究する研究者の正当性も証明される、というわけだ。このように一度思想信条を持ってしまえば、細かな違いなども気にならなくなる。坂崎自身の HP の文言を引用してみよう。

¹ 『音楽文化研究』, 第1号, 聖徳大学人文学部音楽文化研究会, 2001 :
<http://www.seitoku.ac.jp/daigaku/music/profiles/sakazaki/HPET.pdf>

現在「古典調律」と呼ばれるヴェルクマイスターやキルンベルガーの各種調律法は、確かに12平均律とは異なるが、その違いはごくごくわずかなもので、実際にはチェンバロなどでは調律後しばらく放置したらその差以上の誤差が容易に生じる程度のもので、といっても過言ではない。²

フランスの諺に「つばめが一羽飛んだからといって春が来たことにはならない」というのがある。一部の事象だけで全体のことを判断してはいけないという意味だ。ところが、研究者といったのは困ったもので、日々細かい事実をちまちま検証しているためか、何か目新しい発見があるとそれを過剰評価して、それこそ「春が来た」と言わんばかりに大騒ぎしてしまう癖がある。

もちろん、これは純正律を信奉している側にも同じことが言える。純正律による響きの美しさを体感し感動したものは、すべてを純正律が素晴らしいものであるという視点からすべてが純正律を目指して歴史が流れているように捉えるという傾向がある。こうなるとはどんなに小さい兆候でも純正律の正しさを証明しているかに思え、すべての論理を純正律肯定の立場から構築してしう。

こうなると対立する両者の論争は泥仕合となる。どちらがどれだけ実証的か、ではなくそれぞれがそれぞれで自分達の正しさを主張し合う、というイデオロギー闘争の様相を見せるだろう。つまり音楽家も坂崎のような音楽学者も決して無知や不勉強故に純正律を支持しないのではなく、彼らの思想信条として平均律を奉じているということだ。そして残念ながら現状では純正律の支持者は音楽の世界で少数派に過ぎない。このような現状では、純正律音楽研究会の未来は決して明るいとは言えないだろう。

にもかかわらず、何故この私が純正律と平均律の間の問題を長年追いつけているかと言うと、それは私がこのようなイデオロギーの闘争史に関心があるからである。ある業界の中である思想がヘゲモニーを確立し人々の無意識を支配し、イデオロギーが形成されていく過程に興味があるのである。幸いなことに私は音楽学の世界に身を置いておらず、その業界を外から見ているが故に彼らが前提としているイデオロギーの問題を分析する上で有利な立場にあると言える。

今回は、音楽学にとって「平均律イデオロギー」とは何であったのかについて見てみたい。

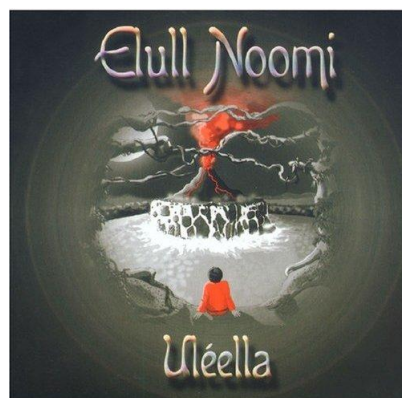
² <http://mvsica.sakura.ne.jp/eki/ekiinfo/tuning.html> (2010年6月10日現在)

CD レビュー 純正茶寮

『ウレイユーラ』 エイラル・ノミ

ex-tension records EX05

純正律音楽研究会理事 黒木朋興



祝 2010 年フジロックフェスティバル MAGMA 参戦

これは素晴らしい。声楽が好きな人は絶対に買うべし！！！！

去年、MAGMA が4度目の来日を果たしたとき、新たに加入したヴォーカルの Hervé Aknin が会場の CD 売り場で一枚のアルバムを示しながら「これ、僕がやっているアカペラのグループで、MAGMA の前のヴォーカルの Antoine Paganotti も参加しているんだ」と言った。ふと見ると、MAGMA 首脳陣が経営している SEVENTH RECORDS が新たに作ったレーベル Ex-Tension から出ているのではないか。「そのうち買うね」と言って忘れていたのだが、この度注文して聴いてみたところ、驚いた。傑作である！

しかし、声楽というのは地域ごとに何でこんなに独自の発展をするのだろうか、と思う。もともと和声に基づいた合唱は西洋クラシックに起源を持つ。それがアメリカに渡ってゴスペルのような音楽になり、日本に来ては清水修や多田武彦のような日本語の響きを大切にしながら独自の音楽を産み出した。

さて、エイラル・ノミを I-Tunes に入れてみるとジャンルの欄に POP と出る。今の日本で、アカペラで POP となると、ゴスペルのようなアフリカ系アメリカ音楽を連想するだろう。しかし、このエイラル・ノミの音楽はもちろんそのようなアメリカ音楽の影響もあるのだが、歌詞は MAGMA のように意味のない人工言語だし、変拍子は多用するは、ヨーロ

ツパのトラッドの影響もあるは、という具合に全く独自のものとなっている。

ヨーロッパの文化の奥深い一面を感じた。

連続エッセイ【外科医のうたた寝】第 23 話
《冬の蒸籠、夏の溶岩、、、》

純正律音楽研究会 理事
医学博士・作曲家 福田六花

ここ 4~5 年、夜の外出はなるべく控えて自宅で料理をしている。健康のためでもあるが、色々な料理を考えることがとても楽しい。僕の料理のテーマは、多種類の野菜を美味しく食べることである。以前は多くのスパイスや、特別な食材を使って難しい料理をしていたが、最近はグッとシンプルである。

冬のあいだは蒸し野菜を頻繁に食べていた。大きめの蒸籠に 5~6 種類の野菜を仕込み、さっと蒸しあげて五島列島の塩で食べる。このシンプルな料理法は野菜の旨味を十全に引き出してくれる。

季節が変わって、最近は溶岩料理にはまっている。近所の割烹料理店で食べた野菜の溶岩焼きが非常に美味であった。直径 30 センチ、厚さ 1 センチほどの円形の溶岩プレートで焼いた野菜は、とても甘く優しい味だ。何度か通ううちに僕も溶岩プレートが欲しくなり、ついに購入してしまった。このプレートは富士山の溶岩を加工したものであるが、富士山の溶岩でなければこれほど美味しくは焼けないと云われる。コンロの上で十分に熱した溶岩に、ざっくり切った野菜と富士桜ポークの切り身をのせて数分焼く。遠赤外線効果なのだろうか、ただ焼いただけの野菜なのに旨味が凝集して絶品である。

7 月になると、庭の畑で次々と野菜の収穫が始まる。茄子、パプリカ、ズッキーニ、南瓜、トマトなどを、溶岩焼きで愉しむ実りの夏はもうすぐだ。

* 僕は知人の紹介で購入した溶岩プレートであるが、富士山の溶岩はたしか売買禁止。いったいどういう経路で僕の家にとどり着いたのだろうか？

連載 【偶然のみちびき】
(~クラシックギター篇~)

純正律音楽研究会 理事

昨年春、溝ノ口に移り住んだ。二十年前米国からの帰国時に、友人に紹介してもらって住んだことがあるマンションだ。元に戻ったような感じになる。引っ越し前は四谷三丁目付近にいて、四谷警察署の向かいには美味しい手打ちそば屋があり、私はすっかりそば好きになっていた。溝の口に移り住んだときも、食に関して真っ先に探したのがそば屋であった。それは比較的簡単に、しかも近所に手打ちそば屋があるのが分かった。洗足学園のほぼ向かいに、溝の口とは思えない特殊とも思えるおしゃれなエリアがあり、そこに手打ちそば屋があった。そこからさらに坂を少々登った同エリア内には、テラス席も備えたフレンチと、イタリアンもあった。

早速、そば屋へ。同エリアに入ってすぐ左手のちっさな二階建てのビルの二階にある。階上へは外階段を利用する。入り口のドアは幅広い金属に縁取られ丈夫そうなガラスがはめ込まれた重い開き戸である。店内はこじんまりしているが調度には店主のこだわりが感じられる。初めてのそば屋である。基本のせいろを大盛りで頼む。なかなかよい、リピートすることにした。

自宅で仕事をしていると、外気や太陽が恋しくなる。昼食も季候がよければ、外気を感じながらの食事をしたくなる。そこでフレンチのテラス席もトライした。ここのテラス席の周囲には緑が多い。緑をながめながらの昼食は、とてもよい気分転換になる。ある日、シェフのS氏がテラス席まで来てくれた。話しているうちに、店内でジャズライブを開催したこともあるという。バイトで入っているTさんはサクスを吹くという。

それからしばらくして、6月の最後の土曜日のこと。朝の9時半に携帯が鳴った。玉木先生からだ。こんな時間にと電話に出ると「きょう、どうすんだ。来るのか?」「きょうですか、きょうのことは承知しておりませんが」「あつ、言ってなかった。だから、今言っている。10時から洗足でレコーディングがあるんだが、来るか?」「はい!伺います」

(筆者注:中略)

そして、翌々日の月曜日、自宅で仕事をしつつも土曜日のことがあって洗足音大の存在感が心の中で大きくなってきた。十数年前、こちらに住んでいたとき、洗足音大の前田ホールに山下和仁さんのコンサートを聴きに行ったことが

ある。パイプオルガンのコンサートも聴きに行った覚えがある。今でも大学でコンサートをやっているかも知れないと思い、仕事が一段落してから、昼食に出る前にネットで検索してみた。あるある。ギターのコンサートもある。私は学生時代クラシックギターをやっていた。それから中断して十一年。書籍翻訳の仕事が終わる7月が過ぎたら、新しくギターを買って、また始めようと決めていた。洗足でのギターコンサートのフライヤーが pdf でアクセスできた。眺めているうちに11時半、昼食に出る時間になった。天気もいいのでテラス席で陽光を浴びながらフレンチでもと家を出た。

あのエリアの坂の上のフレンチに向かって坂を上り始めた。とすぐに、自分の左側にある種のエネギーを感じた。変だなと思いつつ、エネギーの方向を見た。そこにはそば屋に通じる外階段が、まさに階段の真ん前に差しかかっていた。階段を目で上に追うとガラス戸が。そのガラス戸が「きょうはこっちよ！こっちのお蕎麦にきなさい」と手招きしながら私に語りかけているようだった。不思議な感じもしたが、自然に任せることした。陽光を浴びながらフレンチはあきらめ、蕎麦にすることに。方向を90度変え、外階段を上がり、店内に入った。いつものように大きなテーブルの端に座りおおもりを頼み、ほっとして一呼吸おいてから店内のサイドボードに目をやると、なんと、そこにはついさっきまでパソコンで見ていたギターコンサートのフライヤーが。その実物が束になって置いてあるではないか。そうか、それでこっちに呼ばれたのか。そう思いつつフライヤーを取りにと席を立つと、一人の男性が入ってきた。フライヤーを一枚手にし、席に戻ると、先ほどの男性は私の右斜め前の席についていた。私はコンサートでどんな曲が演奏されるのかと、フライヤーの曲目リストを食い入るように見、自分の数少ないギターベースと、知っている曲はないかと一生懸命心の中で照らし合わせていた。すると突然声が。「よろしかったら招待状を差し上げますよ。熱心にごらんになっているから」と。先ほどの男性だった。差し出された招待状は葉書大でそのギターコンサートのものだった。それを見て私「学生時代ギターをやっていたんです。8月になったらギターを買うつもりなんです。」という、「えっ、それなら一緒にお店に行ってくださいよ」と。話しが続き、名刺を頂くと、洗足音大弦楽器コース教授でクラシックギターを指導している原先生とのこと。話しがリュートに及んだ時、私の中学の同級生にギター一家のS君がいたのを思い出した。それを言うと、S君のすぐ上のお兄さんが、原教授のドイツ時代の先生であることが分かった。

後で分かったことだが、原先生は蕎麦好きで、お店の常連さん。ただし、普段の来店時刻は私より30分以上違うそうで、二人の出会いは時間的に極めて希な確率だったらしい。

8月中旬。ギターを買い原先生に同行して頂いた。先生の案内でお店の入っているビルの近くになり、以前一度だけその付近を歩いていた時、こんなところにクラシックギター屋さんがあるんだと、違和感と共に印象に残ったお店だった。お店はビルの二階で、先生が一階のインタフォンを使って来店を伝え始めたその瞬間、信濃町にあったギター屋さんを突然思い出した。すっかり忘れていたが、学生時代何度か行ったことがあるお店だ。エントランスの雰囲気似た部分があったからだと思う。

ギター購入後、そば好き二人がそば屋に向かったことは、いうまでもない。

「Musica おおた」の音楽よもやまばなし

これでいいの？ 日本の音環境

純正律音楽研究会 正会員
音楽事務所 Musica おおた
廣川 深

今回はちょっと思考回路を切り替えて、現在の音環境に関して、私がいつも感じている疑問点や問題点についていくつか述べてみましょう。

その1. JRの駅

まず、構内アナウンスについては隣近所にまで聞こえるくらいに音量を上げている上、同じことを2回も3回も繰り返す。しかもわかりきったこと、わざわざ言わないでもいいようなよけいなことが多すぎる。これは車内放送にも言

えます。発車の合図にしても、なぜメロディチャイムを使うのか疑問ですが、あえてメロディを使うというのであれば、それなりの扱いをしてほしい。メロディの途中でブチッと切れる(カットアウト)などは最悪です。その上大音量で上りと下りで違うメロディが同時に鳴るともう地獄です。音響機器の進歩で昔より音質がよくなったことは認めますが、現状は最悪。最もうるさいのは東京駅。JRに初めて乗った外国人は何が起こったかと思うらしいですよ。

私は5月にイタリアで特急ユーロスターに乗りましたが、どこの駅でもJRのようなけたたましい放送はありませんでした。ドイツの鉄道も、ウィーンの地下鉄も騒々しさはありません。このままではJRは世界一やかましい鉄道になってしまいます。「世界が笑う東京駅」ということにもなりかねないのです。何とかしましょうよ。

その2. 市街地で

スピーカーを使っただけの街頭演説。一昔前のチリ紙交換に代わって廃品回収車。店先で流す音楽等々、街は音にあふれています。

これらのうち、街頭演説は音量に気を配れば問題は少ないとして、廃品回収車などは結構うるさいと思っている人が多いようです。先日も朝日新聞の投書欄に何か改善策はないかというようなことが掲載されていました。この場合、周囲に聞こえなければ意味がないので比較的音量も大きく、しかも歩く程度の速さで移動していることで、ある程度長い時間聞こえているため、うるさいと感じるのです。さらに業者の数も多いようなので、同じところをグルグルまわっているように思えてしまうのですね。これは新聞のとおり、一考の余地がありそうです。

その3. 日常耳にする音楽について

やっとなら音楽のハナシが出てきました。私たちがテレビなどで日常耳にする番組のテーマ曲やCMソングなどの大半は、シンセサイザーやその他の電子楽器を駆使して作られたものです。そうしてできた音楽は、抑揚、イントネーション、表現力が充分でないものが多いような気がします。特に子供の視聴者が多いアニメのテーマソングなどに多いのが、最初から最後まですべてフォルテ。強弱なし。しかもアコースティックの管楽器や弦楽器と異なり、キーボードのついた電子楽器は基本的に平均律で調律されていますので、そのハーモニーは

美しいとは言えない。最近では保育園などでも電子楽器が多用されているようですが、このような音楽の中で育てられると感性に影響が出てくる可能性があります。子どもには(いや、大人でも)アコースティックの楽器で演奏したものを聴かせたいものです。たとえ CM ソングでも。

電子楽器は確かに便利で合奏などでは大活躍をしますが、それも使い道を考えること。教育現場で無条件に電子楽器を多用することは、聴覚と感性を育てることから言えば考えものです。この辺は音楽教育家としては何とかしたいですね。

音環境について日常感じていることをとりとめもなくつづってみました。これらに慣らされてしまうことが怖いですね。聴覚が破壊されるようで。特に子供をとりまく環境については真剣に考えなければいけない問題だと感じている昨今です。

イベントレポート

4月24日土曜日

【吉原佐知子初リサイタル】開催

玉木宏樹が書いた、お箏独奏曲「オンディーヌの眼覚め」の初演の日。吉原佐知子さんの初リサイタルのトリの曲。春爛漫、晴天の上野の森で、奏楽堂が満員になり、お箏の素晴らしい演奏を心おきなく堪能されました。

同日、CD「サクラから春の海まで」が新発売。



4月27日火曜日

玉木宏樹の【贋作、盗作・音楽夜話】新刊発売



バッハのメヌエットが、実は他人の作品だって知ってまし

た？

ハイドンやモーツァルトの贋作盗作話から、小室哲哉の著作権に関わるあの事件まで。

定価 1,680 円(税込) 北辰堂出版刊

5月22日土曜日

【都電貸切コンサート】開催



5月の爽やかな午後、沿線の美しい薔薇が満開。お箏とヴァイオリンの美しいハーモニーを聴きながらの約50分間、沢山の皆様が集まって頂きありがとうございました。

6月5日土曜日

【玉木宏樹の出版記念パーティ】開催



当日は天気も良く、1時半過ぎからお客様がお見えになり、2時過ぎには満員になりました。森重行敏様、安西史孝様、ドクター福田六花様から御祝辞を頂き、西潟昭子様の発声で「カンパニー」簡単な食事の後、ミニコンサート。飛び入りで水野佐知香様、荒井章乃様のヴァイオリン二重奏。その後、お箏の吉原佐知子様と玉木宏樹のヴァイオリン、「花」と「七つの子」で、純正律への微妙な調弦法も披露。そして今年の4月に初演したばかりの玉木宏樹の新曲箏独奏曲「オンディーヌの眼覚め」、最後に「春の海」。たくさんの拍手に、アンコールで「荒城の月」。後はフリートーク、コロムビアの森淑様、ストリング誌の向後由美様、作曲家の坂田晃一様、最後に青山勇様による締め。時間は大分オーバーしましたが、大いに盛り上がりました。

6月24日新発売 第四弾【感傷旅行】

「にっぽんの名曲を旅する」 玉木宏樹のCD(12曲入り)つき
あのなつかしいメロディを聴いて旅に出よう!!

《CD収録曲》 浜辺の歌・雪の降る町を・牧場の朝・花嫁人形・真白き富士の嶺

さくら貝の歌・波浮の港・平城山・ゴンドラの歌

すみれの花咲く頃・島原の子守唄・北帰行

定価2,625円(税込)北辰堂出版刊



CDのご案内

★玉木宏樹の関連作品【市販されていない幻のCD】

現代邦楽研究所 15周年記念キャンペーン

邦楽器が奏でる日本のこころ CD 2枚セット

定価 4,000 円のところ特別価格 2,000 円(税、送料込)



「いちめんの菜の花」

三味線・箏・十七絃・尺八・ヴァイオリン・唄

時代と時空を超えた懐かしさと不思議な響きが純正律で甦った日本のこころ、この美しいハーモニーをお楽しみ下さい。

1. いちめんの菜の花
2. 桜ファンタジー
3. 浜辺の歌
- 4・5. ジャワリ
6. TANGO-AKIKO
- 7.8.9. 四季のうた
10. 迷宮
11. 猫？・・・

「組曲・源氏物語」

三絃・箏・十七絃・ヴァイオリン・朗読

ヴァイオリンと邦楽合奏による伝統的な邦楽のイメージにこだわらない、優雅さとポップさを兼ね備えた新しい感覚です。また、箏の調弦に当たってはピタゴラス音律、ミーントーン、純正律など、曲調にふさわしい音律にも配慮してあります。

1. 若紫
2. 夕顔
3. 末摘花
4. 葵
5. 花散里
6. 明石
7. 幻
8. 匂宮

★ 日本のメロディ【サクラから春の海まで】

CD 新発売記念キャンペーン

5枚セット 定価 11,445 円のところ特別価格 5,000 円(税込、送料込)



「響きの郷へ」 「響きの宇宙へ」 「サクラから春の海まで」 「ゆめくるみ割り人形」 「響きの苑へ」

日本のメロディ【サクラから春の海まで】 ARCH-11001 定価 2,100 円(税込)

お箏とヴァイオリンによる 玉木宏樹作品集第二弾

- 1) サクラ
- 2) 童謡メドレー
- 3) 花
- 4) うれしい雛まつり
- 5) 叱られて
- 6) おぼろ月夜
- 7) 七つの子
- 8) 荒城の月
- 9) 宵待草
- 10) 竹田の子守唄
- 11) 琵琶湖周航の歌
- 12) 城ヶ島の雨
- 13) 春の海

【響きの郷へ】 1) 大地の響き 2) 湖の響き 3) 森の響き 4) 風の響き 5) 伝説 6) ラ・カンパネラ(鐘)

7) タベのパッサカリャ 8) 草原抄

【響きの宇宙へ】 1) 新早春賦 2) 星のしずく 3) あいたい 4) 宇宙の夜明け 5) こころ 6) むかしがたり

7) 宇宙の流れ 8)ねむれ合歓 9)You Mameria 10)アルガ(森)

【ゆめくるみ割り人形】 1)小さい序曲 2)マーチ 3)コンペイ糖の踊り 4)トレパーク 5)アラビアの踊り
6) 中国の踊り 7) あし笛の踊り 8) 花のワルツ 9) ロンドンデリーの歌
10) オンブラマイフ 11)歌の翼に 12) 山の乙女 13) サマータイム
14) スワニー 15) トロイメライ

【響きの苑へ】 1) 春、 2) インターリユード1、 3) 夏、 4) インターリユード2、 5) 秋、
6) インターリユード3、 7) 冬、

今後のスケジュール

2010年9月25日(土)

お箏とヴァイオリンの【♪純正律音楽コンサート♪】

開演：14時

会場：【ラリアル】地下鉄丸の内線 茗荷谷駅徒歩5分

出演：吉原佐知子(お箏)・玉木宏樹(ヴァイオリン)

入場料：3,500円(会員特別価格3,000円)

ご予約：電話03-3407-3726 FAX03-3797-5640

mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

2010年12月23日(木)天皇誕生日

第15回玉木宏樹の【♪都電貸切演奏会の旅♪】

都電荒川線、早稲田駅午後2時出発～三ノ輪橋駅まで約50分の旅

料金：4,500円(会員特別価格4,000円)



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒106-0031

東京都港区西麻布 2-9-2 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-3407-3726 FAX：03-3797-5640

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

<http://www.archi-music.com/tamaki/>

発行責任者： 玉木宏樹

編集： 相坂政夫

平成 22 年 6 月 30 日